第 21 章
近代の遺産

●近代（近代化遺産）

約 250 年続いた江戸時代も開国を機に明治維新を迎え、日本は近代国家として歩み始めます。幕藩体制は明治新政府による近代的な政治体制へと大きく変わり、欧米諸国と対等な国作りを目指し新しい政策を進められます。地租改正、徴兵令、学制など、次々に新しい制度が始まり、工業など新たな産業や経済の発展、電力や交通網が整備されるなど人々の暮らしに急激な変化をもたらしました。

豊後大野市でも農林業や商工業などの産業が盛んとなり周辺から人が集まるようになります。生活基盤の整備として発電施設や交通・土木・教育等の各施設が造られ近代化に重要な役割を果たしました。

西南戦争と豊後大野

明治 10（1877）年、旧薩摩藩士を中心とする士族が明治新政府に反乱を起こし、西南戦争が勃発します。九州南部一帯が戦場となり、熊本城や田原坂などでの戦いを経て、薩摩軍が延岡方面から竹田へ侵攻し豊後大野市内も戦闘に巻き込まれていきます。

5 月 29 日に竹田から退却した薩摩軍は、三重市場に侵入し、5 月 31 日の三重市の戦闘で政府軍を退けます。薩摩軍は臼杵方面に転戦した後再び市域に侵入し、山岳地域に籠城して攻防を繰り広げました。

その戦場のひとつとなった三国峠（三重町奥畑）付近は近世以前の日向街道に沿う要衝地で、両軍の構築した台場群が広範囲に点在しています。明治 10（1877）年 6 月 17 日の政府軍の総攻撃で薩摩軍は敗走し、このとき戦死した兵士を弔う三国神社や墓碑などが残されています。

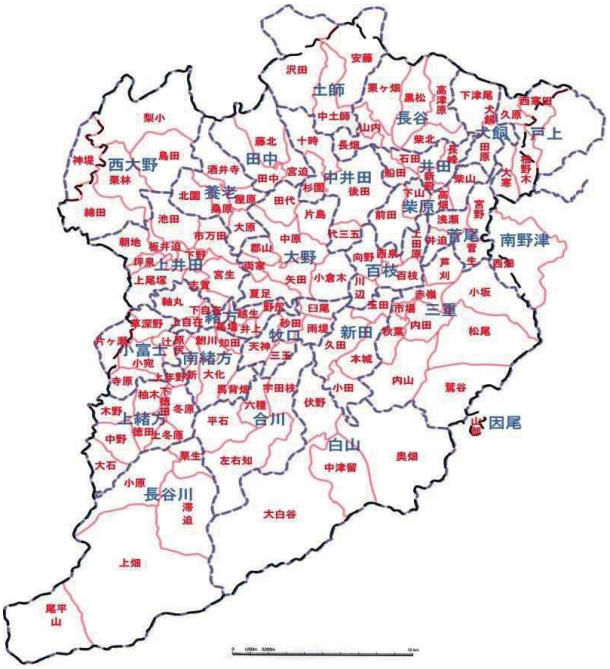

三国峠台場跡

大野郡と町村

明治 4（1871）年の廃藩置県後、大分県は明治 9（1876）年には現在の県域となり、12 か所の郡が設置されます。豊後大野市域の大野郡には郡役所が市場村（三重町市場）に置かれました。当初は元市場組大庄屋であった多田家屋敷を仮庁舎としており、明治 18（1885）年に新庁舎が建設されるまで使用されました。


旧大野郡役所（多田家住宅）

当時の大野郡は宇目（後に南海部郡に編入）や今市（後に大分郡に編入）などを含む 160 村あまりで、その後財政効率化などのため合併を繰り返して明治 22（1889）年の市制町村制施行頃には 30 村となりました。明治 35（1902）年に三重村は町制を施行して三重町となり、翌明治 36（1903）年に犬飼町、昭和 3（1928）年に大野町が続いて施行しています。



明治時代の豊後大野市域の町村（赤は明治 11 年、青は 22 年以降）

旧緒方村役場（国登録有形文化財）は旧緒方村が南緒方村との合併を契機に昭和 7（1932）年に建設された木造庁舎建物で、当時の姿に復元されています。スクラッチタイルの外壁や天井の石膏レリーフなど当時流行した建築様式が残されています。



復元された旧緒方村役場

河川交通の発達

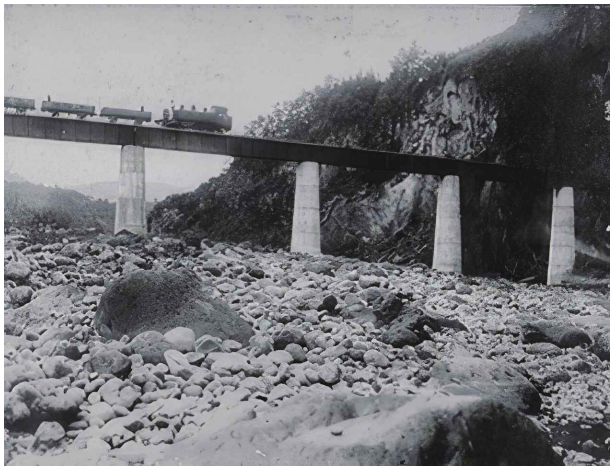
江戸時代に犬飼港まで開通していた大野川の河川交通は明治初期に行われた大野川通船工事により竹田まで舟の運送が始まり、途中の中継の川港が開港しました。細長港跡（三重町宮野）や岩戸港跡（清川町臼尾）にある記念碑により、当時の繁栄が伝えられています。また、蝙蝠滝舟路跡（朝地町上尾塚）は蝙蝠滝を迂回する舟路として設けられました。



細長港跡

鉄道の開通

大分から竹田方面に鉄道の建設が進み大正 6（1917）年に犬飼駅が開通し、さらに延伸されて大正 12（1923）年には朝地駅まで開通します。やがて大分と熊本を結ぶ九州横断路線の豊肥本線が開通し、河川交通に代わって地域経済の発展に寄与しました。



豊肥線岩戸鉄橋

アーチ式石橋の建設

険しい地形の多い市内では江戸時代後期より溶結凝灰岩を利用したアーチ式石橋が架けられてきました。鉄道の開通とともに駅までの物資輸送のための交通路が整備され盛んに架橋されていきました。また灌漑用水路の発達による水路橋として石橋建造が進み、現在でも多くの石橋が残されています。中でもアーチの径間が日本最大の 32.1 mの轟橋や、橋長 78.4 mの長瀬橋、原尻橋などの大型橋は、土木学会選奨土木遺産に認定されています。


轟橋（手前）と出会橋（奥）

井路開削と灌漑の発達

豊後大野では田畑に水を引く用水路は井路とも呼ばれています。井路の開削による水田開発は古くから行なわれていますが、岩盤掘削技術が発達する明治期以降、富士緒井路や若宮井路、明正井路、長谷緒井路などの長距離水路が建設され、農業の発展につながりました。

このような長距離水路の開削により丘陵地にも通水するようになると、軸丸棚田（緒方町軸丸）のような棚田景観が生まれました。

水力発電所の建設

明治 42（1909）年沈堕の滝に水力発電所として沈堕発電所が造られました。ここで発電された電力は、大分～別府間の路面電車の動力源として利用され、大分の近代化を支えました。現在も水力発電所の建物跡が残されています。


沈堕発電所

鉱山の開発

祖母傾山系のふもとでは様々な鉱物資源が産出し、古くから鉱山開発が行われました。

多くの鉱山は短期間での採掘でしたが、江戸時代より採掘が始まっていた尾平鉱山は、錫のほか硫砒鉄鉱など 80 種類もの鉱石を産出していました。昭和初期頃より近代的な施設が整えられると採掘量が大幅に増加し、国内有数の錫鉱山となりました。最盛期の昭和初期には 2 千人もの人々が暮らしていましたが、昭和 34（1959）年に閉山しました。


尾平鉱山選鉱場

太平洋戦争と豊後大野

明治時代以後富国強兵のもとに産業が活発化して西洋化が進む一方、日本は諸外国と武力衝突が起きるようになります。日清戦争に続いて日露戦争に勝利したものの多くの犠牲と多大な戦費を費やします。その後も大陸への進出により戦線が拡大し、日中戦争が始まると多くの若者が出征し、残された家族も物資が不足する中で厳しい生活を送るようになります。

昭和 16（1941）年にアジア・太平洋戦争に突入し東アジア全域まで戦線は拡大しますが日本は次第に劣勢となり、主要都市の多くが空襲を受けるようになります。市内でも昭和 20（1945）年 7 月 30 日に千歳町や朝地町での空襲で死者が発生しています。

本土決戦に備えて三重町大原や千歳町鹿道原に陸軍秘匿飛行場が建設され、多くの人々が建設工事に動員されました。しかし完成まもなく終戦となり、飛行場として利用されることなく元の農地に戻

り、その痕跡は全く残っていません。他にも三重中学校敷地内の防空監視哨（かんししょう）や、大原飛行場近くに造られた通信施設や地下壕なども戦後、埋め戻されました。唯一鹿道原飛行場建設に使われたローラーが千歳小中学校に残されているのみです。

日本全国を戦時体制に巻き込んだ太平洋戦争は昭和 20（1945）年 8 月 15 日の終戦により終結します。戦後のあたらしい政治や制度による平和な社会のもとで国土の復興が始まり経済成長へ向かいます。



飛行場建設のローラー（千歳小中学校）